

1. 片隅にひっそりと住む薬師

この国に住む人間は、皆例外無く魔力を持っている。
量の多さにそこまでの差異はない。

稀にいる魔力量の多い者が魔法職に就くぐらいだ。

しかし体内の魔力は、他人に影響を及ぼす。

常に極小量体から醸し出されていて、感じ方は人それぞれなのだ。
魔力を浴びせる人と、それを受け取る人。双方の魔力相性が関係し、
相性の良い人同士ならば互いに心地好く思う。

そんな中で私の魔力は——誰とも相性が良くない。

みんなみんな、とにかく刺々しくて、不快に感じるらしい。

隣に立つだけで嫌々な気持ちになって、落ち着かないとも聞いた。
自分で自覚することは出来ないが……とにかく攻撃的で、相手を

困らせる魔力の質をしているとのことだった。

どんな人でも魔力相性の良い相手が存在すると聞く。

だが二十三年生きてきて、そんな人はただの一人として会ったことがない。

みんなみんな、私が傍に寄るときゆつと眉根を寄せて、険しい顔をする。だから私はずっと、ひとりぼっち。

捨て子で孤児院育ちなのも、きつとそのせいなのだろう。

唯一良かったことと言えば、準魔法使い職である調薬師の素養があつたことか。

おかげで孤児院へ訪問した魔法使い様に、私は拾ってもらえた。

『魔法薬は誰でも作れるわけじゃない。けれどあなたの魔力は、それに向いているわ』

お城で働く調薬師様は皆、私みたいに刺々しい魔力をしているの

ですかと聞けば、そうじゃないと首を振られてしまったけれど。

とにかく私は、その魔法使い様の手引きで魔法学校に通うことになった。

弟子入りしたわけではないので恩人様とはそこでお別れになったのだが——その方が私の才を見い出してくれたおかげで、こうして今も国勤めの調薬師として働いている。そして十二分のお給金をいただけているのだ。

学校生活に関しては、相も変わらず孤独で。いじめられなかっただけよかったのだろう。

今だって職場で浮いているが、意地悪をされているわけではない。ただずっと、好奇の目に晒されている。自意識過剰かもしれないが、そう思うのだ。

自分が選んだ道であり、自分の魔力のせいでもあるのだが——

年々、人里離れた場所でひっそりと暮らしていきたいという思いが、強くなっていく。

けれど生きていくにはお金が必要だから——無駄遣いせずに毎月多めに貯めて、早めに退職することを目標にしている。

誰にも迷惑をかけずに、静かに暮らす。それが私の夢だ。

「ねえ、エジーさん。室長が呼んでいたわよ」

これまでのことと、これからのこと。思考に耽りながら広い調査室の隅でせつせと大鍋を掻き混ぜている私に、同僚女性が声をかけてくれた。

私はビクリと肩を跳ねさせ、ほぼ条件反射で後退る。

掻き混ぜ棒が鍋の縁に当たって、高い音を立てた。

「あ！ あっあっ、わざわざすみません！ ありがとうございます！」

「っ、……ええ」

嫌だろくに親切に声をかけてくれた同僚に、私はぺこぺこと頭を下げる。

顔を顰めたものの、嫌味も悪態もつかなかった同僚は、難しい顔をしたまま離れていった。

私はホッと息をついて、作業に戻る。

（室長、室長ね。室長室にいればいいのかな？）

早くしないと焦りを抱きながら、すぐには離れられない鍋をグルグルと混ぜる。

制作者の魔力を流し込んで作る魔法薬は、とにかく繊細なのだ。

それでいて調合の過程で色々と変質するものでもある。

私の魔力を入れて作ったのに、完成したものは甘くて飲みやすいと評判なのが、もったもたる例だろう。

だから途中止めになると、何が起こるか分からない。

結局その後、私はキリの良いところまで調合を進め、それから火を止めて。多少早足になりながら、壁際伝いにそそくさと移動する。人に不快感を与える魔力をしているのだから、なるべく迷惑をかけないように。そう心がけて行動するのが、私の信条だ。

「あえ……？」

しかし室長室のドアの前に辿り着き、ノックをしようと手を伸ばした瞬間。何故かドアがひとりでに開き、手が空を切る。

ぽかんとして顔をあげると目に入る、向こう側に引かれて開いた状態の扉。そしてドアノブを握ったままこちらを見て軽く目を見張っている、同僚男性。

——思っていたより近い。

そう脳内で呟くなり、ドツクンドツクンと心臓が暴れ出す。

「——はひっ!? あ、や、しゅみましえん！」

「……ああ、いや……」

咄嗟に後ろに飛び退き、壁際にぺたりと背中を張り付ける。

申し訳ないことをしてしまったと猛省して、私はぎゅっと目を瞑った。そうしてじっと、彼が通り過ぎるのを待つ。

「……ふう」

目の前で一度立ち止まった気配があつたが、無事に通り抜けることが出来たようだ。

私はホッと胸を撫で下ろして、これ以上迷惑をかける相手がいないかと辺りを見渡す。

よかった。もう近くに人はいないようだ。

再び安心して、私が所属している王国魔法調薬室のトップである、室長様の部屋に向かった。

「し、失礼します、エジーですう……」

一体どんな用事なのだろう。何かしてしまっただけかな。そう不安に思いながらドアをノックすれば、低い声がドア越しに「入ってくれ」と応える。

私は一度深呼吸をしてからおっかなびっくりでドアノブを握り、おずおずと室内を覗き込んだ。

「あの……」

「ああ、来たな。座ってくれ」

「えあ……っ!？」

そろそろと室内に足を踏み入れれば、応接セットの一部、黒い革張りのソファを手で示された。

あわあわして震え上がっていたら、グレーージュの髪をしているダニディーな初老男性、ギリク・アツペム室長が、静かに立ち上がる。そして私に座るようにと促したソファの、向かいのソファに腰か

けた。

まさかそんな恐れ多いと、更にブルブルと震え上がっていれば、小さく息を吐く音が耳に入る。

「いいから、ほら。座りなさい」

「は、はひい……っ」

なるべく近付かないように。慎重に慎重に行動して、非常にぎこちない動作で着席する。

申し訳ございません、と謝罪を込めて頭を下げれば、また溜め息の音が聞こえた。

「単刀直入に言う」

「は、はい」

ドツキンと鼓動が跳ねた。嫌な汗が吹き出る。

クビかな……？と考えてしまって、収入面の不安から体が冷えて

いく。

「明日、君の家に衣類やアクセサリーが届く手筈になっている。それを身に付けて、明後日の昼十一時にこのレストランに行きなさい。時間厳守だ。化粧も派手にならない程度に、きちんとするよう」
「え？……えっ？」

更には届いたものは全て、その後好きなようにしていいこと。それから明後日は休み扱いだがお給金はきちんと出ることを追加で説明されて、私はただひたすらに混乱した。

もしかして怪しい取引に巻き込まれるのでは、と嫌な想像をしながら差し出されたカードを見れば、有名な高級レストランの外観イラストの上に連絡先と、住所が書いてあった。

戸惑いながら受け取って、まじまじと見つめる。

宣伝用のカードだろうか。これだけで素敵なアイテムだが、ここ

に私が行くというのが不思議でならない。

やっぱり何か悪いことに巻き込まれるのではと不安になるが、室長に限ってそんなことないかと冷静な思考を僅かに取り戻す。

「いいか、必ず行くんだぞ。これは室長命令だからな」

「は……、はい……」

念を押されて、よく分からないながらもどうにか頷く。

そうすれば室長はご満悦そうに頷き返して、サツと出入り口のドアを手で指し示した。

「用件はそれだけだ。仕事に戻りなさい」

「は……い……」

もう一度カードを見下ろしてから、私は立ち上がる。

腰を折って礼をしてから、失礼しますと声をかけ——ドアを閉める前に一度室長のことを視線で窺ってから、部屋を辞した。

結局、何の用事なのかも分からないまま。

私は前日に届いた、やたらと高級そうで可愛いワンピースに身を包み、これまた高そうなアクセサリーをおっかなびつくりで身に付け、きちんとお化粧をした。

そうして指定された高級レストランに、指定された十分前には辿り着いたのだが――

私の魔力に一瞬だけ目を見張ったものの、瞬時に営業スマイルを取り戻した店員さんに案内された先の個室では、更に混乱することになった。

「はえ、あ、あ、宰相ほしや官、さみやつ」

直接お会いするのは初めてだが、式典などで遠巻きに見たことがある、超がつくエリート様だ。

そんな人を前にして。私は動揺のあまり、本当に酷い噛み方をしてしまった。

赤面し、それからすぐに青褪める。とんでもない失態に頭がクラクラとし始めた。

心臓も絶えずバクバクしていて、お腹の前で祈りの形に組んでいる手に力が籠り過ぎて、ぷるぷると震え出す。

「ええ、こちらにどうぞ」

「ひっ、は、はひ」

緊張からよたつきながら、四人かけのテーブルの、宰相補佐官様の右斜め前の席に腰かける。

頭の中をぐわんぐわんさせながら正面を見ると——見知らぬ顔。

「あえ……!? あっ、すみませ……っ」

その近すぎる距離に、私は驚いて咄嗟に立ち上がった。

高級レストランの客室に、ガタンツと似つかわしくない音が響く。慌てて椅子の背凭れを手で押さえるが、音を立ててしまったことは取り消せない。私はごめんなさいごめんなさいと必死に頭を下げ、二人に謝罪した。

「大丈夫ですから、座ってください」

「は、はい……っ」

「……………」

宰相補佐官様から再度着席を促されて、私はもう一度だけ謝ると半泣きで椅子に座り直した。

正面の席に座る男性は、啞然とこちらを見ている。何だコイツと思っているのだろう。

不快な上に騒がしいなんて、最悪でしかない。

せめても室長が不利益を蒙らなければ良いと思うが、どうしたら

良いのだろう。

「すみません……」

こんな立派なお店で、一人で騒いで。

本当に何をやっているんだと自己嫌悪に陥った私は、縮こまる。

——するとこれまで啞然としていた正面の男性が、何を思ったのかふわりと、優しく微笑んだ。

「……大丈夫ですよ。僕も宰相補佐官様も、貴女のことを悪く思っていないから」

「え……？」

穏やかで、落ち着いていて、僅かに掠れている低い声。

その声が優しく私に語りかけ、目が合った拍子に彼のグリーンの瞳が、ゆるりと細まった。

「ほら、深呼吸をしましょう？ それすればきつと、落ち着きますよ」

向けられる眼差しはあたたかく、かけられる声は優しい。

予想外な事態に私の脳は思考する能力を失い、私の双眸はパチパチと瞬くだけ。

しかし呆然としている最中で、疑問が湧き出す。

どうしてそんなに、優しく出来るのだろうか。

どうして私を見て、にこにこ笑っているのだろうか。

そんなこと——不可能なはずなのに。

「ここは、お任せした方が良さそうですね。私は隣室に控えていますので、何かあったら呼んでください」

「はい。承知いたしました」

「……?……?……?」

宰相補佐官様が立ち上がって、すたすたと歩いてさっさと出ていってしまった。

私はわけが分からずただ目で追いかけて、それから首を傾げる。

広い個室には二人きり。大きな窓からは陽光がさんさんと降り注ぎ、レースのカーテンが煌めいていた。

「改めまして。こんにちは、初めまして。僕は城で文官として働いている、オーリンと申します。年は二十六。よろしくお願いします」
「え……？あ、えっと……エジー、二十三歳、王国調薬室の調薬師、です……？」

何故か自己紹介が始まってしまつて、私は混乱しながらもどうか自分のことを話す。

それをオーリンさん？はにこにこしながら、ウンウンとしきりに頷いて聞いてくれていた。

「今、お付き合いしている人はいないと聞いていますが、それに間違いはありませんか？」

「お付き合いしてる人……？　いません。いるわけ……」

これからも、この先も。そんな相手が出来るわけなどない。そう断言するために言葉を続けようとしたのだが、「それはよかった」の声で掻き消される。

「僕も、恋人はいません。……ほら、この国ではとにかくゴツイ男が好かれるでしょう？　だからどうしても、男として意識されなくて」「そう、なんですか……？」

悩みを打ち明けられて、不躰ながらまじまじと彼の容姿を観察してしまふ。

薄茶色の髪に、鮮やかなグリーンの瞳。

確かにこの国の男性にしては線が細いように見えるが、頼りない細さではない。

全体的に柔和な雰囲気、顔立ちは整っている。

醸し出される魔力すら優しく、心地好い。

段々と動揺が収まり始め、前に座る男性から与えられる安心感に、私はホッと息を吐いた。

「あの、隣に行ってもいいですか？ここだとちよつと、距離があつて……話づらいので」

「えっ!? そんな、だめです！私の魔力はとっても不快なものだから、嫌な気持ちに、なっちゃいますよ……!?」

慌てて引き留めたものの、彼は首を横に振って立ち上がる。

私があわわしている内にテーブルの向こう側から回ってきて、あつという間に傍まで来てしまった。

そうして私の左側にある椅子を引くと、何食わぬ顔で座るのだ。

「ち、近いっ、近い！ごめんなさい、嫌でしょう？ごめんなさい、私に悪意は無いんです。魔力のせいなんです！本当にごめんなさい」

い！」

「……………」

いつもいつも、私は人を嫌な気持ちにしてしまう。

けれど大体の人はその不快感に蓋をして、接してくれる。

嫌がらせをされたり、悪口を言われたことなんて、成長してから一度もない。

幼少の頃は子供ならではの残酷さで叩かれたり意地悪を言われたりすることもあったが、それは毎回大人が止めてくれた。その上、そんな意地悪な子達も互いに成長して、孤児院を出る頃には、過去の行いを謝ってくれた。

魔力のせいだと、分かっているから。

みんなみんな、不快に感じながらもどうにか普通に接してくれる。だからこそ申し訳ない。

優しい人達をなるべく、不快にはしたくない。

だから、遠くでひっそりと暮らしたい。

迷惑をかけることは嫌なことで、悪いことだから。

「——大丈夫」

「……っ」

低くて、しっとりとした声。

震える手に彼の右手がそっと触れて、私はカチンと硬直した。

「僕は、大丈夫。君と居ても、嫌な気持ちにはならない。だからほら、触れても平気」

「——……えっ？」

弾かれたように顔を上げれば、私に触れているオーリンさんは笑ったままだった。

私に触れているのに——穏やかな笑みを、崩していかないのだ。

信じがたい状況、そして光景に。頭が真っ白になる。

「……ごめんね。どうにかしてあげたいと気持ち之急いて、君の心が追い付く前に行動してしまっただ。手が冷えて、震えてる。可哀想なことをしてしまっただね」

「は……、えっ？」

左手を両手で包み込まれて、手の甲を優しく撫でられている。体温を別け与えられているのだと気付いて、胸が熱くなった。

私が押し黙っているその間にも、彼はずっと穏やかに微笑んで言う。なんだかよく分からないけれどじわじわと視界が滲んで、鼻の奥がツンと痛んだ。

「大丈夫、大丈夫。僕は大丈夫だよ。不快になんて感じない。寧ろ君と居ると落ち着くんただ。とっても相性が良いんだね？」

「あい、しょう……」

完全に思考が止まっている。

彼の言葉をおうむ返しにすることしか出来ない。

それなのに止めどなく涙が溢れてきて、心がぐちゃぐちゃだ。

「僕はね、きっと誰とでも魔力の相性が良いんだと思う。だから君とのお見合い話が出たんだ。まあそれは……あまりにも僕の女性受けが悪いせいでも、あるんだけどね」

「おみ、あい……」

グズグズと鼻を鳴らしながらまた一言だけ呟けば、そうだよと応えて手の甲を撫でられる。こちらを見下ろす形の良い瞼は、とろりと目尻を下げた。

「ふふ、お顔がびしゃびしゃになっちゃったね。拭いてあげる」

「あう……」

良い香りのするハンカチを優しく顔に当てられて、涙が吸い取ら

れていく。

その間にも彼の右手は私の左手を握っていて、そのせいで拭いてもらったそばからまた雫が零れ落ちていた。

「ふふふ、このままだとエジーちゃんがカラカラになっちゃうかな？ お水、飲もうね」

「うん……」

テーブルの上のグラスを取って、口許に寄せてくれる。

私は冷たい水を飲み下した後、ほうつと息を吐いた。

「涙、止まったかな？ びっくりしたねえ」

「うん……。びっくりした」

涙が止まっても、まだ頭がボーツとしている。

私は問われたことに拙く返して、触れている手をぼんやりと見下ろした。

「ほんとうに、嫌じゃ、ないの？」

「本当だよ。僕にとっての君は、ただの可愛い女の子だよ」

「ただの……かわいい、女の子——」

そんなこと、言われたことない。初めて言われた。

そう心の中で呟くと、鼓動がドクドクと駆けはじめた。

ひんやりと青褪めていた頬に熱が集まり、じわじわと体温が上がっていく。

「うれしい……。すつごく、うれしい」

「うん。嬉しいね」

上目で顔色を窺えば、にこりと笑いかけられる。

よかったねえと更に声をかけられて——私の中で、あたたかな感覚が弾けた。

「……、……かつ、わいい」

「……？」

嬉しくて、ふわふわした感覚に浸っている。そんな私の顔を、じっと見つめられているようだ。

よく分からなくて首を傾げていると、目尻を赤く染めたオーリンさんに、にこっとなつつこく笑いかけられる。

「ううん。笑顔がとっても……とっても可愛かったから。びっくりしちゃったんだ」

「え、がお……？ 私、笑ってたの？」

もしそれが本当だとしたら、自然と笑ったのなんて、いつぶりだろう。場の空気に合わせて笑うことはあるが、心から笑ったことなんて——思い出そうとしても、記憶にない。

「うん、にこおってしてたよ。これからは僕の傍で、いっぱい笑ってね」

「……はい」

手をきゅっと握って、また笑いかけてくれるオーリンさん。おひさまのような体温と笑顔を受けて、私の胸はトクンと高鳴った。

感動でうまく言葉が出ないという初めての経験をして。私はそつと、気恥ずかしさに視線を落とす。

「少ししたら宰相補佐官様が様子を見に来られると思うから、それまでお互いの話をしよう？ 僕の好きなものを君に知ってもらいたいし、君の好きなものを僕は知りたい」

「好きなもの……」

これまで、何が好きとも考えずに日々を過ごしてきた。

目標は早めの退職で、人里離れた場所でひっそりと暮らすこと。

そのために贅沢は禁止し、節制してきたのだ。

「え、えっと……」

でもそれを言うことは憚られるし、何か思い当たるものを……と、焦っていれば。オーリンさんは眉尻を下げて、頭を振った。

「ごめんね、焦らせちゃったね。ただゆっくりお話しできたら、それでいいんだ」

「あ……はい。ごめんなさい……」

気をきかせてしまったことに落ち込むと、手の甲を撫でながら「謝らないで」と語りかけられる。

「僕の話に相槌を打ってくれるだけでもいいからね。気楽に、してほしい。僕は、大丈夫だから」

「大丈夫……」

安心させるような言葉に、私は顔を上げた。

上目で見つめた整った顔は、いつ見てもにこにここと優しい笑みを浮かべている。

「君の支えになりたいんだ。君を幸せに——いや、君と一緒に幸せになりたい」

「……どうして、そんな」

嬉しいのに、そんなことをしてもらう義理は無いと。モヤモヤとした気持ちが胸を占め、また俯いてしまう。

素直に受け取るべきだとも思うのに。どうしても私は、後ろ向きになってしまった。

「どうして、かあ……そうだねえ。ただ純粹に君のことを好ましく感じて、困っているなら助けてあげたいと思った。何より僕は、困っている人は放っておけないタチだからね」

「な、なるほど……？」

とても立派なことを言っているように思えるのに。オーリンさんは何故だか、苦く笑っていた。

優しくしてくれる理由に取りあえず納得が出来た私は、それが気になって仕方ない。

「……はは。まあそういう事だから。仲良くしてくれると嬉しいな」
「は、はい！ よ、よろしく、お願いします……！」

何か、誤魔化されたような気がしたけれど――

オーリンさんがとんでもなく優しい人だと知った私は、素直に彼の気持ちを受け止めることにした。

何より、私の魔力を感じて平気な人なんて、この先もう出会えることなど無いかもしれない。

結婚するかどうかは取り敢えず置いておいて。

終着点が夫婦でなくとも、せめて友人として関係を繋ぎたい。

オーリンさんは、孤独な私の人生の中で――唯一の光なのだから。

それから大体、三十分くらいが経って。

この個室に、仲介役の宰相補佐官様が戻って来られた。

私達の状態をさっと見て確認し、次に口頭で意思を確認する。

そうして双方が前向きであると確認した宰相補佐官様は、そこで初めて笑みを見せ、すぐに表情を引き締めたのだった。

その後、宰相補佐官様の口から私とオーリンさんの職場や出自の説明がなされて。私は自分が孤児であると明かされた時にはギクリとしたものの、オーリンさんは顔色を変えなかった。

それどころかオーリンさんのご実家が平民の商家のだと解説された時に、窺うような視線を向けられた。

恥じらうことのない素晴らしいご実家だと思うのに、何を不安に思っているのだろう。

それを不思議に思ったが、問いかける隙はなく。次は宰相補佐官様から、これからのことについての説明を受ける。

まず、お互いに歩み寄って仲を深めること。そして職場きつかけの縁談ではあるが、基本的に誰も干渉はしないとのこと。

けれど何かのきつかけで拗れてしまった場合は、直属の上司に相談すること——そう説明と注意をしてから、宰相補佐官様は席を立った。

ここの個室はあと一時間借りているから、二人で好きなように過ごしていいと。言い残した彼は、二人分の感謝の言葉を背に受けながら去っていく。二人きりになった個室の中で私達は顔を見合せ、お互いにほんのりと笑った。

しかし丁度その時、廊下に繋がるドアがノックされる。

失礼しますと声をかけて入ってきたのは、お店の従業員。

最初の一人目の後に、もう二人。皆料理皿が乗ったカートを押してやってくる。

テーブルの上へ音を立てずに料理が並べられていく様子を目にしてい、そう言えばここはレストランだったと思い出した。

——それにしても、品数が多い。そしてあまりにも豪勢だ。

煌びやかな料理の数々を前にして、私は慌てふためくばかり。

そうして私が落ち着きなくキョロキョロとしていると、正面の席からぷつと吹き出す音がした。

「はは、ごめんね。……食べようか？」

「は、はい……！」

クスクスと笑う声にほんのりと頬が熱くなるけど、不快ではなくて。私は先ほどまでとは違った意味でそわそわとしながら、ナイフとフォークを手を取った。

* * *

二人で穏やかに食事をして、店を出た後。私は彼に、家まで送ってもらった。

職場には寮がある。けれど集団生活は避けたかったので、私は城から少し離れたところにある、比較的家賃の安いアパートに住んでいるのだ。

ちよつと見た目が宜しくない二階建てアパートを見上げて、オーリンさんが黙り込んでいる。

まだ一緒に居れると嬉しくなつて送ってくれるというのに頷いたが、やっぱり遠慮するべきだったか。

「み、見た目はそんなに良くないんですけど、部屋の中は綺麗なんですよ……？」

「えっ？……あ、いや。違うんだ」

強がりでも何でもなく、心配されるほど酷い物件ではないのだ。それをどうにか伝えようとしていたのだけれど、見当違いであつたらしい。

「その、セキュリティがね。女の子の一人暮らしで一階っていうのが……心配になって」

「ああ、なるほど……」

オーリンさんは、本当に優しい人だ。

心配してもらえるなんて初めての経験に胸が熱くなる。

私もオーリンさんに何かをしてあげたい。

彼のために、何かをしたい——そんな気持ちが湧き上がってくる。

「その、部屋に上がりますか？ 大層なおもてなしなんて出来ませんが」

「……………」

まずその第一歩として、立ち話も何だからと部屋に誘ってみた。するとオーリンさんはきゅっと眉根を寄せて、難しい顔をする。こちらを見下ろす翠の瞳が、微かに揺れていた。

「あの……？」

何かまずいことを言ってしまったかな、と視線をうろうろと迷わせていると。

オーリンさんはふにやりと困ったように笑い、小さく首を傾げた。「男をそんな簡単に部屋に誘ってはいけないよ。ペロリと、食べられてしまうかもしれないからね」

「……あ」

ゆっくりと、美しく整った顔立ちがこちらに近付いてくる。

それを啞然と見守っていると、左の頬に柔らかな感触が触れた。

ふんわりと鼻腔を擦ったいい香り。

頬に残った柔らかな感触と体温。

脳裏には、間近で見た煌めくグリーンが焼き付いている。

「じゃあ、また。戸締まりはきちんとね」

最後になつこりと笑って、オーリンさんは踵を返した。

縦に長いスラリとした体躯。背筋はピンと伸びていて、歩き方も美しい。

そんな彼の後ろ姿を、私はただ呆然と見送る。

そうして彼の姿が見えなくなっても——私の鼓動は、いつまでもドキドキと高鳴っていた。

2. 夢見る乙女

顔に影がかかり、見上げた先にある整った顔がゆっくりと近付いてくる。

立ったまま自然と目を閉じた私の唇に重なる、柔らかな感触。一度離れて、至近距離で可愛いねと囁く。

私はふわふわとした気持ちのまま笑って、再び唇を奪われた。柔らかな感触がちゅう、と吸って。熱い舌がペロリと表面を撫でる。それからもう一度ちゅっと私の唇を吸ってから、彼の口は離れていった。

ゆっくりと目蓋を押し上げて見上げれば、そこにある美しい翠の瞳。そのままうつとりと見上げていると、口付けがもうひとつ。

大きな手で肩を撫でられ、腕を撫でられ――

口付けの合間に、そっと乳房を持ち上げられる。

「あ、あ……」

たふたと左右の山を揺さぶられ、服の上からスリスリと先端を撫でられる。お腹の奥がきゅんきゅんとしていて、どうにも切ない。

「おっぱいの真ん中が、ポツンって浮き出てきたね……？」

「ん、だっ、て……っ♡」

スリスリ、スリスリ。絶えず刺激されている乳頭。

自分で触ってもあまり気持ち良くなれなかったそこを弄られて、何故だか今はゾクゾクしている。

「ひゃあ、あんっ！」

撫でられるだけでも気持ちが悪かったのに。

きゅっと先端を摘ままれて、私はぶるりと震え上がった。

「可愛いね、エジ。大好きだよ」

「オーリン、さん……」

私の魔力を浴びても平気だなんて、本当に夢みたいだ。

しかもこうして愛してくれる。触れてくれる。

幸せすぎて、どうにかなってしまいそう。

「あ……」

「大丈夫、僕に任せて？」

今の今まで立っていたはずが、いつの間にか寝台の上に寝転がって
いて。服を着ていたはずが、何故か全裸だ。

恥ずかしくて、彼の裸を見ることが出来ない。

可愛いね、と更に囁かれる。そしてすりっ♡と、お股の上の
ところにある小さな芽を撫でられた。

「あん……!」

いつも一人で寂しくて、悲しくて――

私には寝る前にここへ触れてしまう悪癖がある。

だからこの快感には、慣れたものだった。

けれど今日は一段と気持ちいい。

これが人の手でしてもらう快感かと感動していると、また唇を吸われる。

「気持ちいいね、エジー。ふふ」

「あっ、あっ、はいっ♡オーリンさん……っ♡」

右手でちゅこちゅことクリトリスを擦られ、左手では胸の突起を弾かれる。かと思えば彼の口が右胸に近付いて、ちゅっ♡と右の乳嘴が吸い上げられた。

「ひあぁっ♡♡」

気持ちいい。嬉しい。大好き。

色んな気持ちが溢れ出て、衝動的に彼の首へ腕を絡める。

唯一、私の魔力を浴びても大丈夫な人。

私に笑いかけてくれる人。たった一人の、私の大切な人。

まだ出会ったばかりだし、あんまり依存しちゃ駄目だと寝る前に思っていたはずなのに。今はどっぷりとハマってしまっている。

(ん、寝る前……?)

何かひっかかりを覚えたが、快樂でそんな思考など振っとなでいてしまう。

親指でクリトリスをグリグリされ、入り口がくちゅくちゅと撫でられている。

早くそこに入れてほしい。いいや、『入ってきて』ほしい。中をぐちゃぐちゃにして、それから彼のものを奥まで――

「ゆっくり、入っていくからね」

「うん……」

くぶん、と指先が中に埋まって。それから慎重に進んでいく。

「あっ、あ、あ……っ♡」

「ふふ、よく濡れているね」

一度自分で触ってみた時は、痛いだけだった。

けれどオーリンさんの指だとしても気持ちがいい。

きつと私は、誰ともそんな関係になれるわけがないと——そう思ってきた。

けれど自分で自分の初めてを奪うのが怖くて。希望を捨てられなくて。大事に大事に取っておいた初めてを、オーリンさんに貰ってもらえる。

「結婚して、僕と家族になろうね」

「あ、かぞく——うん、うんっ！嬉しい……！あっ、ん♡」

膣内をくちゆくちゅと優しく撫でられながら、彼の言葉に胸がド

キドキする。

嬉しくて——幸せで。衝動に任せて自ら彼の唇を吸えば、あたたかな視線を向けられた。

「あ、んん……！ふあ、あっ♡」

「ん、イツちゃった……？ふふ、上手だね」

クリトリスをスリスリされながら中を擦られて、あっという間に達してしまった。

頬や額、鼻の頭に何度も口付けが落とされ、中も柔く擦られる。

ビクビクと跳ねる私の体を見下ろす視線は色っぽくて。更に中が、キュン♡と締まった。

「……あ、はあ……、は……っ」

「落ち着いてきた？中も締め付けが緩んできたね」

膣内の感触を解説されることに赤面すれば、再び頬に口付けられ

る。

緑色の瞳はどこまでも熱っぽく、そして穏やかだ。

不快感を微塵も得ていない様子に、私は心底安堵した。

「……そろそろ、挿れてもいいかな？」

「……っ！は、はい……。いれて、ください」

私を唯一受け入れられる人。私が唯一触れ合える人。

ずっと諦めてきた誰かと親密になる未来が、すぐそこまで迫っている。

愛し合う男女が想いを交わし合い、結ばれる。それが私の身に起きるなんて、本当にあり得ないと思っていた。

それなのに今は、実現しようとしている。

「あー、いつもよりかなり大きくなってるから……ごめんね、受け入れる側は辛いかもしれない」

「だ、だい、じよ、ぶですっ」

ぬるぬると入り口に熱いものが当てられて、それだけで気持ち良くなってしまう。

胸がドキドキと煩い。入り口は蕩けてパクパクしているから、すぐにでも入ってしまいそうだ。

「ちゃんと、責任は取るからね。ずーっと君の傍にいるよ」

「……っ、ぐす……っ。はい、はい……!」

広い背中に腕を回してしがみついて。しっかりと彼に掴まった——いや。逃がさないようにと捕まえた私は、衝撃に備える。

耳元で私の名前を呼ぶ声がした。

そっと目を閉じれば、より顕著に感じるぬくもり。

安心感にほうっと息を吐いた、その瞬間。

硬いものがググツと押し付けられ、入り口が大きく開いて——

「——んっ？」

私はパチリと目を開いた。

意識が覚醒し出すと共に遠かった音が近付いてくる。

すると丁度その時、近くの広場にある時計塔の鐘の音が耳に入ってきた。時刻は朝六時。起きて、仕事の準備をする時間だ。

「……あれっ？」

オーリンさんは？と辺りを見渡すが、いつも通りの自宅だ。

ちょっと狭い寝室だけど、リビングダイニングと別れているだけで素晴らしい。

そう思ってこの物件にしたのだが——と思考が逸れ始めて、慌ててかぶりを振る。

（えっ、私……とんでもなく破廉恥で、彼に失礼な夢を見てしまった……？）

いくら嬉しくて舞い上がっていたとは言え——出会った日の夜に、その人とのエッチな夢を見てしまうだなんて。

それに何より夢だからこそ、願望がだだ漏れだったように思う。

「うううう……！」

一人でもいいんだと。一人の方が向いているんだと。

そう思って生きてきたのは虚勢であつたのだと、他ならぬ自分に思い知らされてしまった。

私は朝の寝台の上で頭を抱え、知りたくなかつた事実にとだ唸る。

（いつそ死んでしまいたい……！消し炭になるんだ！）

自棄になって自滅的なことを考えるが、当然実行できるはずなどなく。

私はそうして暫く自己嫌悪に陥り、やがて遅刻しないために、すごすごと仕事の準備に取りかかった。

* * *

職場に到着して業務を開始した後は、とにかく仕事のことだけを考え続けた。

余計なことは考えず、ひたすら調合に集中する。

有り難いことに室長から呼び出されることもなかったので、恐らくは宰相補佐官様から報告が入っているのだろう。

私とオーリンさんの上司間で話が出て結ばれた縁談とのことで、きちんとお礼を伝えるべきだと思う。

けれど今朝のことではなかなか整理がつかず、結局夕方になって漸く、私は行動に起こせた。

「その、ご挨拶が遅れて申し訳ございません。つい浮わついた気分になってしまっているので、とにかく仕事に集中していたのです」

室長室にお邪魔した私は、今。先日のように長椅子に腰掛け、みっともなく言い訳をしている。

そんな私に室長は、「いいから」と言うように手を振っていた。

「構わない。遠目から見ていても、君の気迫が伝わってきたからな。大体想像はついた」

「……すみません」

真実は恐らく、彼の予想の斜め上にあると思うが、わざわざ訂正して恥をかく必要はないだろう。

静かに俯いて赤面する私に、室長は軽く笑った。

——しかしこうして表面上の態度だけを見ると、未だに勘違いしそうになる。

私の前でも常にポーカーフェイスなこの人も。じわじわと私の魔力に侵されて、不快感に晒されているのだ。

まだ私がここに入りたての頃。たまにこちらを見つめる視線が鋭くなることに気付いた私と同時に、室長もそれを自覚した。

お互いにポカンと見つめ合い、それから私が落ち込む前に、彼は先手を打って謝罪してくれたのだ。

これまでも不快感を露にすることなく接してくれる人は、確かに存在していた。

しかし大丈夫なんですかと問いかけてみて、本当は……と打ち明けられたことは少くない。そしてそうじゃない場合は、優しい嘘で慰められた。

だから私は室長の件にショックを受けることはなく、それよりもとても感心した。

この人が上司でよかったと、心から思ったのだ。

「あの、今回の縁談は、室長とオーリンさんの上官様から始まった

縁談だと聞きました。本当に、有り難うございました」

「ああ、そうだな……。彼もあの見た目だから、結婚相手を見つけるのに苦勞をしていてな。君と相性が良いようで、俺もあっちもひと安心だ」

「え……？」

あの見た目？と首を傾げて、私は脳内に疑問符を敷き詰める。

しかしオーリンさんも、同じようなことを言っていたように思う。私の目に映るオーリンはとっても素敵で、物凄く格好が良かった。背が高いし、スラリとしているけど頼りなく見えるわけではない。手は大きかったし、チラリと見えた手首は私のものよりガツチリとしているようだった。

「まったく、商人は卑しいだとか文官はなよなよしいだとか調薬師は陰気だとか。偏見とは本当に——ん？ああ、もしかして知らない

のか？」

「えっ？……あ、えっ？」

「あーまあ、それならそれで……」

「????？」

怒涛の勢いで喋ったかと思えば、一人で何かに気づき、一人で納得している。

そんな上司の前で、私はただひたすらに困惑していた。

「何はともあれ、オーリンくんが悪いところがあるわけではないんだ。君が彼を素敵だと思うのなら、それで解決だ。何も問題は無い。一般的な美醜の感覚など、気にする必要などないのだから」

「えっ？は、はい……？」

頷いてみたものの、いまいち納得出来ない。

でもオーリンさんに悪いところは無いと断言してもらえて、取り

あえずホツとした。

初対面の私をあそこまで気遣い、親身になってくれた人を悪く言われるのは、いくら尊敬する室長でも不快に感じてしまう。

安心してリラックスした私はそれから少し雑談をして、室長室を後にした。

礼をしてからドアを閉め、振り返る。

それから数歩歩いて調合室に足を踏み入れた瞬間、私はパチパチと目を瞬かせた。

（……そういえばこの国って、ムキムキな男性が多いよね）

街でたまに見かける細身の男性は、大体が異国人だ。

この国で生まれ育った男性は、ここにいる同僚達と同様にとっても上背があって、筋肉隆々。オーリンさんもこの国の生まれだと言っていたが、それは珍しいことなのだろう。

（うーん？）

何かが引つ掛かると。壁際に避けて首を傾げていると、同僚女性が顔を顰めながらも近付いてくる。

「ねえ、エジーさん」

「えっ!? あっ、は、はい！」

硬い声で話しかけられて、ビクンツと跳び上がる。

あたふたと手を動かして狼狽していると、女性の眉がもつと寄ってしまった。

「何か困り事かしら？ あなた、いつでも一人で抱え込むでしょう」

「えっ、……えっ!? らいッ、らい丈夫です！ あしっ、失礼ひましゅっ！」

盛大に慌てふためきながら、ビューンと素早い動きで自分の机まで戻る。

隅っこにある、自分の作業スペース。机の奥でしゃがみ込めば、足元にある材料や資料、器具で周りから切り離される。

そこにちよこんと収まってホッと胸を撫で下ろした私は、次の瞬間にはまた、小さく跳ね上がった。

（まって、さっきのあれは心配して声をかけてくれたんじゃないの!? ああ、何て失礼なことをっ!!）

心優しい同僚女性に、とんでもなく失礼なことをしてしまった。

私の魔力を浴びることに堪えながらも声をかけてくれたのに、恩を仇で返してしまったのだ。

私は愕然として、床に尻餅をついた。

（私のばかばかっ！こんなの迷惑をかけるかけない以前の問題でしょう!?）

心の中でポカポカと自分の頭を叩く。

しかし私がそうして思い詰めていると、机の上から何やらコトンと音がした。

首を傾げて鈍い動作で中腰になると、机の上には可愛い包装のキヤンデイが一つ。キヨロキヨロと辺りを見渡してみるが、誰もこちらを向いていない。

誰がくれたのか分からないが、食べて良いと言うことなのだろう。

「あ、ありがとうございますう……」

そっとお礼を言って、私は恐る恐るキヤンデイを手についた。

そうして再びしゃがみ込み、捻ってある包装をほどく。

ペラリと包み紙を剥がすと現れたのは、艶々とした赤い飴玉。

少し緊張しながら口に含めば、ストロベリーの香りと甘酸っぱい味がした。

（おいしい。うれしい）

やっぱり皆、いい人なのだ。

だから早く、迷惑をかけるのを止めたいと思うのに——やっぱり寂しくて、悲しくて。どんよりと落ち込んでしまおう、私だった。

* * *

就業時間を知らせる鐘が鳴り、私はハッと顔を上げた。

もうそんな時間だったかと慌てて片付けに入る。

既に片付けを終えていた同僚達がまばらに職場を去っていき、私はチラチラと周りを確認しながら手を動かし続けた。

やがて定時で帰る人がいなくなった頃に。丁度片付けが終わった私は、鞆を左から右へ斜めにかけて、ペコリとお辞儀する。

「お、お疲れ様ですう……」

身を小さくしてそそくさと調合室から退室し、廊下に出てホッと息を吐く。

それから慣れた道を歩いて行き、程なくして所属部署のエリアから出た。

広くなった廊下は裏門がある方向に向けて人の流れが出来ている。人の多さを目の当たりにして、もう少し遅い時間になるように調整すればよかったかと後悔が過るが、引き返すのもおかしい。

（せめて、隅っこを歩こう）

なるべく他の人に自分の魔力を当てないように。私は鞆の革紐をギュツと握って、右の壁際ギリギリを俯いて歩いた。

ちよっと人混みが私から離れている気もしたが、そうして慎重に行動しているとすぐに開かれた両開きの出入り口が見えてくる。

ここまで来ると、裏門までもうすぐだ。

それから暫く歩けば、自宅に着く。

やっと人の波から解放されると、私は胸を撫で下ろした。

「あ、来た」

「……？」

前方から男性の声がして顔を上げると、出入り口のすぐ傍に背の高い男性が立っていた。

顔をチラリと見上げて、ドツキンと鼓動が跳ねる。

「あっ、あっ！」

「エジーちゃん」

今朝見た夢がフラッシュバックして赤面する私と、手を振りながらにこにこしてこっちに向かってくるオーリンさん。

その場に立ち止まってわたわたと慌てていると、長い足でスタスタと歩いてきた彼が、目前に迫る。

「お疲れ様！昨日の今日だけど、会いたくなっちゃってさ。会えるといいな」と思って待ってたんだ」

「あっ、おちゅ、おつかれしまれす……！」

流れるような動作で両手を取られ、きゅっと力を込めて握られた。確かに文官様も、寮暮らしでなければこの通路を使って帰るのだろうか。

けれどまさか会うことになるだなんて。あんな夢を見てなければ手放しに喜べるのだが、今は嬉しいやら申し訳ないやらで気持ちぐちゃぐちゃだ。

「ご飯はまだだよね？一緒に食べよう？」

「は、はい……っ！ぜ、ぜひにっ」

目を回しながらもどうにか頷けば、オーリンさんは蕩けるように笑って、ささっと私の左側に立った。

後ろに回った手に右肩を抱かれ、密着して歩き出す。

「ふふ、嬉しいなあ。昨日以来、ことあるごとに君のことを考えてしまってたね。早く顔が見たかったんだ」

「……っ、……っ」

肩に触れている手の大きさと、服越しに伝わる熱。

時間が経っても脳裏にこびり付いている部分的な夢の光景と重なり、体から汗が吹き出す。

「ん……？　どうかした？　何だか様子が……」

「あっ、いえっ！　その、なんでもないです！」

慌てて否定をしたが、納得できないのだろう。

オーリンさんは不審げに首を傾げ、じっとこちらを見つめていた。

（夕日に照らされている翠の瞳が綺麗だなあ——はっ！　そうじゃないくて！）

美しい煌めきについ見惚れてしまったが、それどころではなかった。コロンか何かのいい香りもするが、それに気を取られている場合でもない。

「え、えへへ……」

「……まあ、何でもないならいいんだけどね」

誤魔化すように笑って顔を見上げれば、オーリンさんは少し困ったように笑った。

けれど目尻がほんのりと赤く染まっていることから、悪く思われていないのだと気付く。

——そもそも夕日に赤く照らされているから、気のせいかもしれないけれど。

「僕のお気に入りのレストランまで少し歩くけど、いいかな？」

「あっ、はい！大丈夫です。歩くのは得意ですから」

行きも帰りも徒歩なのだ。

この通勤時間について私は、多少時間はかかるが運動になって良いと思っっている。

「それならよかった。……ああそうだ。ここから歩くとは言え、君の家からは近いはずだよ」

「そうなんですネ。お気遣いありがとうございます！」

帰り道の心配もしてくれるなんて、本当に優しい人だ。

私は胸が熱くなって、ゆるりと口角を上げた。

これまで殆んど笑うことなんてなかったのに、この人の前だと安心してすぐに笑ってしまふ。

決して悪いことではないのだろうけれど、それが何だか気恥ずかしかった。

「帰りは是非送らせてね」

「え……。でも、あの、オーリンさんのお家は……？その、私の家からとレストランから、どちらが近いんですか？」

おずおずと見上げて問いかければ、にっこりと笑いかけられる。

それから彼は小首を傾げて、少し甘い声を出した。

「是非、送らせてね」

「は……。はい……」

答えないということは、私の家からだと遠くなるということだろう。けれど妙に圧を感じて、私はつい頷いてしまった。

するとオーリンさんは珍しく歯を見せて、ニカツと快活に笑った。

「よかった、夜道は危ないからね。一人でなんて歩かせられないよ」
「……ありがとうございます」

とてもありがたい。ありがたいのだけど、こういった反応をしていいのか分からない。

これまで不審者に襲われた経験なんてないし、そんなこと起きっこないと思っっているが――それは、言わない方がいいのだろう。

（それに長く一緒に居られるのは、嬉しいし）

ずるいかなと少し後ろめたく思うが、それでも始めての体験に心が踊る。

誰かと一緒に夕食を摂るなんて、孤児院にいた頃以来だ。

だからもう十年は前になる。

しかもレストランでお食事なんて。人混みを避けてきたから、外食をした経験も少ない。

（あ……でも、周りの邪魔にならなければいいな……）

昨日のお店は高級店のようだったから、個室での会食だった。

けれど庶民向けお店は個室が無いところがほとんどだろう。

ならせめて壁際の席が空いているといいなと考えた、私であった。